

岐阜大：長野宏子、大妻女大：大森正司、岡田安代、岡本順子、矢野とし子、

聖カタリナ短大：加藤みゆき、産業能率短大：田中功、朝外国文献社：中村重男

《目的》隣接諸科学（医学、農学、薬学、工学）が生産に重点をおいた応用科学であるとするれば、家政学における研究は、生活を基本とした応用科学であると考えられる。安定成長期を迎えた今、生活全体が一見安定している様に見えるが、肥満、成人病、噛めない子供などの諸問題、また、ウサギ小屋、トリ小屋的住居から青少年や老人問題と、様々な諸問題が山積している。この様な事を概観すると、真に家政学の役割が時代のニーズとして要望されているものと考えられる。本研究では、家政学の構成と構造を明らかにする目的で、家政科学技術分類表(CHE)を作成し、要素技術連関、国際比較、歴史的変遷などを検討してきた。今回は、日本家政学会誌と韓国家政学会誌の研究課題について比較し、知見が得られたので報告する。

《方法》日本家政学会誌の論文 574編(1979～1983年)、韓国家政学会誌の論文 212編(1979～1983年)を対象として分析した。家政科学技術分類表(CHE)を用いて論文をインデクシングし、機械集計、出現頻度と連関度を求めた。

《結果》①付与された標数の数は、日本では3～7個付与されたものが多く認められ、韓国ではもっと少ない標数であった。②要素技術の出現頻度としては、日本家政学会誌には「食品・生活空間」、「有史時代・生物の性」などが多く認められたが、韓国では「家庭経営」などが比較的多く認められた。共出現頻度においては、「食の技術×食品・生活空間」、「化学的物質×食品・生活空間」、「生物の性×食品・生活空間」などが高い共出現頻度を示した。